

共感・共苦できる感性を育み引き出す授業を目指して

～2000年度全学共通カリキュラム総合B群：

「人権・生命・環境：日本社会と民族差別」の経験から～

西原 廉太

一、はじめに

昨年度、私は初めて全学共通カリキュラム総合B群科目のコーディネーターを担当した。経験者の先生方からは、「コーディネーターは大変だよ」「ご苦労様だね」等の言葉を事前にかけていただいていたので、少々気が重かったのも事実である。確かに、準備、調整、実施、評価、ふりかえりと、かなりの負担があった。しかしながら、今、ふりかえりつつ思い至る一つの結論は、これほど可能性のある授業はないのではないか、ということである。全カリ総合Bは、立教大学が自信をもって発展させていくべき質を間違いなく有しているように思う。

本稿では、昨年度実施した実際の授業内容の概要と、学生から提出されたレポートの一部を紹介することを通して、全カリ総合Bの持つ意味を確認したい。

二、2000年度全カリ総合B群「人権・生命・環境：日本社会と民族差別」授業概要

本授業は、西原廉太(文学部キリスト教学科)、金性済(在日大韓川崎教会牧師)、香山洋人(立教大学チャプレン)、TAの内藤幹子(大学院生)の4名が全期間出席し、さらに6名の単発講師を外部から招く構成で行われた。全13回の教室での授業以外に、オプション・プログラムとしてフィールド・ワークも実施した。紙面の都合上、すべての内容を紹介することはできないが、以下、授業概要を簡単に報告したい。

【第一回】イントロダクション(1)

授業に関するオリエンテーションを行った。全体の流れを説明した後、無記名で「石原発言について」というテーマで一文を書いてもらう。

【第二回】イントロダクション(2)

冒頭、西原、金、香山、内藤の4人で、あるアジア人労働者を主人公とした10分ほどの「寸劇」を行った。授業の中で、教員がにわか演劇を演じるというのも総合Bならではのであろう。続いて、それぞれの教員が「自分の思い」を語った。自分がこの講座にどのような思いで臨んでいるのか、民族差別に関してどのような思い、経験を持って

いるのかなど、それぞれがそれぞれの語り口で「自分のアイデンティティー」を明らかにする時間である。

【第三回】映画『指紋押捺拒否』を観る

【第四回】多文化、多民族共生社会とは（1）講師：金迅野（キムシニャ）さん

一人目の単発講師として、金迅野（キムシニャ）さんをお招きした。神奈川県国際交流協会にお勤めの金迅野さんは、自分自身の歴史を振り返りながら、私たちが「常識、普通」と思ってきた事柄を問い直すための大切なポイントを与えられた。そして、在日であれ、日本人であれ、全ての人には自分自身を見つめ問い直す作業、「自分の井戸を掘る」作業が必要であることを語ってくださった。

【第五回】多文化、多民族共生社会とは（2）講師：佐藤信行さん

在日韓国人問題研究所にお勤めの佐藤信行さんを招いた。佐藤さんは、資料を使って在日外国人に関する法的処遇がどのような流れにあるのか、現在、在日／滞日外国人がどのような状況におかれているのか、差別の実態などについて解説をしてくださった。「不法」とは何か、法とは何かについて考えさせられる講義であった

【第六回】リフレクション（1）

各講師の講義の最後に、毎回、学生には短いコメントを書いて提出してもらう。決して出席票代わりではないのだが、学生たちは実に熱心に自らの感

じた思いや考えを書き込んでくれる。この日のリフレクションでは、学生のコメントから事前に抽出した複数のキーワードを、ヴィジュアル・プレゼンターを使用して大写しし、それぞれのキーワードについて教員が応答を試みた。教員の一人は教壇から降りて、学生たちの間をワイヤレス・マイクを持ちながら意見を拾い歩く。

【第七回】在日の生きた声と物語（1）講師：鄭映恵（チョンヨンヘ）さん

新進気鋭の社会学者として知られる鄭映恵さんに講義をしていただいた。少子化問題、労働力不足など、日本の現状と外国人労働者の問題を合わせて読み解きながら、外国人を排除する今の日本社会のあり方が、結局は日本人自身の首をしめているのではないかと指摘された上で、このような現状は必ず変えることが出来るし、それが出来るのは皆さんだというエールを学生に送ってくださった。

【第八回】在日の生きた声と物語（2）講師：尹卿恵（ユンキョンヘ）さん

桜本保育園の保育士、尹卿恵さんのお話を聞いた。子供の頃の物語から始まって、初恋、そしてその時に体験したつらい民族差別など、優しく何気ない語り口の中で厳しい現実が語られていった。韓国の民族衣装「チマ・チヨゴリ」を着て登場された卿恵さんは、最後に『島引き鬼』という、被差別部落の中から生まれた物語の絵本を読み聞かせてくれた。彼女の人柄ともあいまって、聞くものの気持ちに自然に入

り込んでくるような授業に、多くの学生が涙を流した。

【オプショナル・プログラム】川崎フィールド・トリップ

教室での授業は自ずと限界がある。本来、実際に人々が生きる場において当事者から物語を聴くこと以上に重要なことはない。そこで私たちは、オプショナル・プログラムとして川崎での現場研修を実施した。訪問先は、多摩川の川崎市側の河川敷にある地域で、羽田の埋め立てなどで働いた朝鮮の人々が定住し形成された在日コリアンの集住地区である「戸手」、在日と日本人が共に生きる地域作りを担う「ふれあい館」、日本、韓国、フィリピンなど多様な背景を持った子供たちが通う「桜本保育園」である。最後に「在日の味」である焼肉を、焼肉発祥と称される店で味わいながら楽しい一時を過ごした。

【第九回】リフレクション（2）

【第十回】沖縄の視点から 講師：平良愛香さん

沖縄出身の若手牧師である平良愛香さんは、三線（サンシン）と呼ばれる沖縄の三味線を持って登場された。沖縄の歴史、ご自身の体験、アイデンティティーの所在と現実について率直に語ってくださった。しかし、学生が最も衝撃を受けたのは、「自分は同性愛者なのだが」という言葉であった。まったくの初対面である学生に、それも250人近い学生を前にしてのカミングアウトの意味を、彼らは必死で受けと

めようとしていた。

【第十一回】アイヌの視点から 講師：長谷川由希さん

長谷川さんは、自らが持つアイヌとしてのアイデンティティーを回復しようと苦闘されてきた方である。学生たちとほとんど年齢が変わらない、その等身大の証言は胸に迫るものがあった。

【第十二回】まとめのパネル・ディスカッション

これまでの授業を総括し、意味を引き出し、整理する時である。金、香山、内藤、西原の4名が、それぞれの立場からパネル・ディスカッションを行い、学生たちの意見もその都度拾いあげる。あまりにも抽出されるキーワードが豊富で、時間がまったく足りない。学生たちの思いについては期末レポートの中で展開するように求めた。

【第十三回】最後のふりかえりとレポート提出

三、学生のレポートから

受講した学生たちが今回の授業をどのように受け止めたのかを、提出された期末レポートから紹介したい。提出されたレポートの多くが高い質を有しており、それらすべてを紹介したいところではあるが、ここではごく一部、しかも授業の感想に関する部分に限ることとする。

（理学部1年女性）

この授業の前半に、コーディネーターの先生方が、それぞれ在日朝鮮人とのふれあいを通して、また在日朝鮮人

として、様々な考えを語られたことがあったが、私はその授業にまず大きな驚きを感じた。なぜなら、今まで授業というのは、個人的感情は可能な限り排し、より表面的に行うものだという認識があったからだ。しかし、先生たちが率直に語る出来事は人間性に満ち溢れていた。まるで日本社会の縮図と思われる学校の中のみで生きてきた私にとって、この授業は大変強い衝撃を始めから感じていた。同時に、自分の中に感情があったことを、思い起こさせてくれる大変貴重な授業だった。

(独文1年女性)

はりきって最前列に座った最初の授業。いきなり始まった先生達のパントマイム。大変インパクトがあった。そして三人の先生の導入的発題。聞いていて涙が出てきた。なんていい授業なんだろうと思った。大学に入って、それも立教に入って良かったと思った。それから毎回前の方に座ることに決め、月曜が楽しみになった。私はこの四ヶ月という短い間の中で、「他人」と違う「自分」を好きになること、ということも大きなことを教わった。

(法学部1年女性)

この授業は、形態からしてとても新鮮であった。それぞれの人が、それぞれの視点で語るという短編小説のような1回1回の授業が、聞いている側が感じたkeywordによって一つの大きな物語となるという、どれも魅力的な授業だった。「生きた声」が聞けるということは、何とすばらしいことだろうと

思う。私も何年か後、人に語って恥ずかしくない生き方がしたい。

(経済学部2年女性)

少し大袈裟な言い方かもしれないが、人を愛すること、また愛されることはそれくらい大事なことだと思う。また数十年経った今でも言えないことがあるとおっしゃっていた。私はそのことに大変驚いた。私が今まで生きてきた中で、そのようなことがあったのだろうか。そのつらさは計り知れない。尹卿恵さんはこれらのお話を、明るい声で淡々とお話して下さった。私たちの前で自分の過去を話すのにはどのくらいの覚悟が必要だったのだろうか。最後の絵本の朗読では思わず涙が出てきそうになった。きっとそのつらい過去にも負けずここまで生き抜いてきた強さがその勇気を与えたんだと思う。そしてその強さは自分を愛することから生まれたのではないだろうか。

(日文3年女性)

先日、本校で行われたニュースキャスター、筑紫哲也氏の特別講演を聴きに行った時、筑紫氏の話の中で今回の授業の事を思い出した。筑紫氏は現在の日本の問題として3つの「無」を挙げていた。それは「無知」「無関心」「無感動」の3つである。今回の授業で私は自分の中の3つの「無」を嫌という程思い知らされた。即ち、今回の授業で私は多くのことを「知り」「関心を持ち」「感動した」のである。在日朝鮮人の人々の話をもっと聞きたいと思った。彼らが何を思い、私たち日本人に何を

求めているのか教えてもらいたいと思った。「島ひき鬼」に感動した。こうして挙げていくと際限ない。今回の授業で、私は本当にスポンジに水が吸い込まれるようにいろいろなことを吸収した。

(仏文1年女性)

この授業を通して、結局は自分への理解と再認識を深めるための場であったように思います。また、このように、一つの問題を多角的に学ぶ総合Bプログラムは、私が大学で学びたいと思っていた学問形態そのものです。

(日文2年女性)

授業は、無言劇(パントマイム)あり、生演奏あり、そして何よりも多様な視点からのそれぞれの先生の講義、とバラエティーに富んでいて、毎回退屈することなく受講しました。先生と学生が皆で一つの授業を作り上げていく気がしました。私もその中の一かけらになれていたのなら嬉しいです。

(経済学部4年男性)

この授業で、多くの方々が生の一番語りがたい部分を語ってくださったことに本当に感謝しています。このような機会は、なかなかあるものではないと思います。後につながる授業、つなげようと思う授業というのは、あまりありません(因みに全カリの授業では初めてです)。このような授業がもっと受けられるようになると有意義だと思

います。私自身、大学生生活に疑問を感じ、自然と大学から足が離れそうになってしまいましたが、この授業を受け、自分の中でいろいろ考えることができ、本当に良かったと思います。

四、全カリ総合Bの可能性

今回の総合Bは、準備した側の想定を遥かに超えるダイナミズムが授業の中から生み出されていった。教員たち自身が学び、成長させられる経験であった。学生たちは知識ももちろん吸収したであろうが、それ以上に、この授業を通して、自分自身の生き方、自分自身のアイデンティティーを問うた。教室はいつも緊張感に包まれていた。私語などはもちろんない。大教室の授業でもこのようなことが可能なのである。これこそ、全カリ総合Bが持つ可能性ではないだろうか。もちろん課題も多い。半期だけ、というのはあまりにも短い。前期、後期で連結できるような設定はできないものだろうか。人数の問題もあるが、フィールド・ワークのプログラムをさらに柔軟に展開できればより可能性は広がる。大学における教育の原点、原動力が、実はこの総合Bに内包されているのだと思う。

(にしはら れんた 本学文学部助教授、
2000年度、2001年度 総合B群「人権・生命・環境」コーディネーター)